

短報

大学と病院との実習における協働体制を育む取り組み

—急性期実習意見交流会の試み—

池口 佳子¹⁾ 宇都宮明美¹⁾ 櫻井 文乃¹⁾ 畠山 有希²⁾ 伊藤 里奈²⁾

Measures to Nurture Collaboration between a University and a Hospital for Practical Training

—Trials on Opinion Exchange Meetings Regarding Acute Illness and Conditions Training—

Yoshiko IKEGUCHI, MA, BSN, RN¹⁾ Akemi UTSUNOMIYA, MSN, CCNS, RN¹⁾
Fumino SAKURAI, PhD, RN, PHN¹⁾ Yuki HATAKEYAMA, RN, PHN²⁾
Rina ITOU, RN, PHN²⁾

[Abstract]

In our university, due to the integration of St. Luke's College of Nursing and St. Luke's International Hospital, measures are being taken to strengthen clinical education and further enhance the practical training environment. Prior to this integration, since 2013, the university has planned and held opinion exchange meetings as part of the adult nursing practice (acute illness and condition) taught in the third undergraduate year to deepen exchanges between the university teachers and the hospital staff who provide clinical guidance.

This year, at the third meeting, we adopted a structure that allowed clinical instructors to play a central role in the meetings, from planning to participation, by having two educational resource nurses collaborate with the teachers. As a result, we created a platform to promote a lively exchange of views, through which members from different wards not only shared their initiatives for practical training and the joys they experienced while providing practical instruction, but also were able to improve the training environment in ways that crossed boundaries between the wards. From now on, as participation of the staff nurses is encouraged along with the educational resource nurses, the challenge is to deepen the understanding of practical guidance by the wards as a whole.

[Key words] adult nursing practice (acute illness and conditions), opinion exchange meeting, the educational resource nurse, the staff nurse, collaborate

[要旨]

本学においては聖路加看護大学と聖路加国際病院との一体化を受け、臨床での教育を強化すべく、実習環境の更なる充実に向けた取り組みが行われている。学部3年次に行われる成人看護学急性期実習においては、一体化前の2013年度より、臨床指導を行う病棟スタッフと大学教員との交流を深めるために、大学側が企画し意見交流会を実施してきた。

3回目となる今年は、臨床指導者も主体的に参加できるように、2名の学部実習担当者が企画から参加し、教員との協働で運営をするような体制とした。その結果、教員と共にこの事業を推進した学部実習担

1) 聖路加国際大学看護学部 急性期実習担当 St. Luke's International University, Nursing Administration, Adult Acute Care Nursing
2) 聖路加国際病院看護部 St. Luke's International Hospital, Department of Nursing

当者が進行を担うことで、病棟のスタッフ間の情報共有が活発となり、各病棟の実習への取り組みや実習指導を行って嬉しかったことなどを共有するのみならず、病棟を超えた実習環境の改善につながった。今後は、学部実習担当者とともに部署スタッフの参加を促し、病棟全体の実習指導に対する理解を深めることが課題である。

〔キーワード〕 急性期実習、意見交流会、学部実習担当者、部署スタッフ、協働

I. はじめに

本学においては、2014年度の聖路加看護大学と聖路加国際病院（以下、病院とする）との一体化を受け、臨床での教育を強化すべく、実習環境の更なる充実に向けた取り組みが行われている。効果的な実習指導には、臨床指導者と教員の協働が不可欠である。

3年次に行われる看護学実習、急性期実習においては、周術期看護を学習する2週間の実習を行っている。現在の実習病棟は、聖路加国際病院 OR・ICU・ICCU・4W・4E・5E・6W・7E・8Eの9カ所と多岐にわたっており、学生は周術期患者を受け持ち、『麻酔や手術という侵襲を受けている患者と家族が、その健康状態の急激な変化に対処しながら社会生活に向けて順調に回復できるように看護過程が展開できる』という学習目標のもと実習を行っている。

臨床場面の教育においては、臨床施設の職員と目標、コンピテンシー、期待される成果（学生のレベル、実践期待、臨床スケジュール、関連情報）について、継続的に、明確に、矛盾なく共有すべきである¹⁾とされ、急性期実習においても、従来から実習前後には、実習担当病棟の管理者または実習担当者の参加のもと、実習打ち合わせと振り返りの会を約1時間行っていた。しかし、時間が短いこともあり、病棟を超えた情報交換や教員と臨床指導者が率直に意見を言い合える場にはなっていなかった。そこで、実際に実習を担当する学部実習担当者や部署スタッフと大学教員が自由に交流を深める機会がほしいという要望もあり、2年前より急性期実習意見交流会（以後、意見交流会とする）を行っている。今回の報告では、意見交流会を通して行われている大学と病院とのよりよい実習環境を整えるための協働への取り組みについて、報告をする。

II. 実習における大学と病院との協働体制を整える

臨床実践の環境は、学生が効果的な実習学習を行うために非常に重要な要素となる。そのため、スタッフに自分が学生に見せている行動に気づいてもらい、学生の専門職としての成長を育むように協力を求めることは、学

生と一緒に活動する施設のスタッフの準備として大切なことである。教員はスタッフと互いに尊重し信頼し合う関係をつくる必要がある²⁾。学生が学ぶ環境を整えるためには、実際に看護を実践しながら教える部署スタッフや実習の窓口となる学部実習担当者との関係構築が求められる。

1. 実習打ち合わせ会・実習振り返り会

1) 実習打ち合わせの会：実習開始の1カ月ぐらい前に設定

実習病棟の管理者および学部実習担当者の参加のもと、実習の概要（目的・進め方・日程等）とともに、学生のレディネスを共有し、意見交換を行っている。

2) 実習振り返りの会：実習終了後、成績評価が終了した時期に設定

実習病棟の管理者および学部実習担当者の参加のもと、実習の振り返り・評価報告、インシデント等の情報共有と次年度に向けた課題の確認等を行っている。

3) 実習打ち合わせの会と実習振り返りの会の課題

実習打ち合わせの会と実習振り返りの会は、およそ1時間として運営している。急性期実習に関わる病棟から参加者が集い、実習の目的や成果を共有する機会として効果的に機能している。しかし、時間が短いこともあり、大学側の実習目的や実習概要の説明や担当教員の紹介等を行うと、9カ所の実習病棟の出席者全員から十分な意見を聞く時間がないことや、実際に指導を行っている部署スタッフとの交流を図る機会がないことが課題となっていた。そのため、大学側の企画・運営で、病院急性期実習関係者との意見交流会を催すこととなった。

2. 意見交流会の報告

1) 2013年度・2014年度の意見交流会の様子

第1回、第2回の意見交流会とも、全員が輪になり、病棟ごとの取り組みの内容を報告しながら、意見を交換するスタイルで進めた。この2回の交流会の目的は、お互いを知り、交流を深めることに重点がおかれた。

①第1回 2013年度 意見交流会

2013年8月23日 17:30～19:00

場 所：大学505・506

参加者：病院23名，教員5名，計28名

実習前の開催であったため，実習に向けた抱負を共有し，実習に対する意見交換を行った。その結果，『どんな看護師を育てたいのか』という問いについて話し合いが進み，お互いの病棟によって実習受け入れスタイルは異なるが，『自分たちが大切にしてきた，聖路加の spirit をもった看護師を育てたい』という意見に参加者たちが賛同して，閉会となった。

②第2回 2014年度 意見交流会

2015年3月13日（金曜日） 17：00～18：30

場 所：302講義室

参加者：病院18名，教員6名，計23名

一体化に伴い，学部実習担当者と部署スタッフという役割が創設された後の初めての交流会であった。実習終了後の3月に開催したため，各病棟が1年間の新たな体制での実習を振り返り，学生の実習終了時のアンケート内容や評価などを報告しながら，情報を共有し合った。また，実習受け入れ病棟に行った科目評価からの意見について，今後の改善点を検討した。この年にはCNE コースも創設されており，CNE コースの院生5名とコース担当教員（松谷・奥）も参加した。

〈第2回意見交流会終了後に行った参加者へのアンケート結果 回答者20名〉

Q1 交流会は有意義だと思いますか

はい 20名（100%） いいえ 0名（0%）

Q2 交流会の希望回数と時期について

1回：2名（実習直後） 1～2回：1名（実習中・後）

2回：11名（実習中・後 3名・2回 実習・前後 7名・時期不明1名）

Q3 意見交流会で検討していきたい議題や意見など（抜粋）

- スタッフと教員，スタッフと学生のつながりをもっと深めたい。（学部実習担当者）
- 学部実習担当者もしくは病棟管理者が成績評価に参加したらどうか。（NM）
- 教員と学部実習担当者の連携。（その他）
- 報告会とは別に交流会を持つということは，よりスタッフレベルのNSが来た方がよいと思うのでスタッフの参加をどう促すか検討してもよいと思う。（その他）
- 教員と部署スタッフとの関わりを保っていくためにも，もっと部署スタッフが出席できるような環境の工夫やカンファレンスの有効な運営などを考えるとよい。（その他）
- ICU や OR では，学生からのスタッフへのフィードバックが乏しいため，何かスタッフのモチベーショ

ンが上がるような対応を検討していきたい。（学部実習担当者）

- 大きすぎるのでグループを作ってじっくりと話をしたらよい。共通テーマの項目を決めいい話を共有するのもよい。（その他）

2) 2015年度実習開始前 第3回 意見交流会

部署スタッフの参加を促すために意見交流会の企画・運営から，学部実習担当者の畠山（8E病棟）と伊藤（6W病棟）が参加した。

①企画段階における検討内容と対策

検討1 忙しい部署スタッフの参加を促したい。

対策1：開催場所を病院内で探す。

対策2：若い部署スタッフも参加しやすくするために，参加費をなくし，飲み物等は各自持参とする。

対策3：勤務後でも負担がなく参加できるように，会の時間を1時間に短縮する。

対策4：病棟の学部実習担当者を通じて，交流会への部署スタッフの参加を促す。参加したくなるようなポスターを作成する。

検討2 実習に向けた有意義な交流の機会としたい。

対策1：参加者が，実習指導を通じ体験や取り組みを共有する。

対策2：大学側からの情報提供：学生のレディネスや学内での学習内容・教科書を紹介する。また，昨年度の実習生の感想を伝え

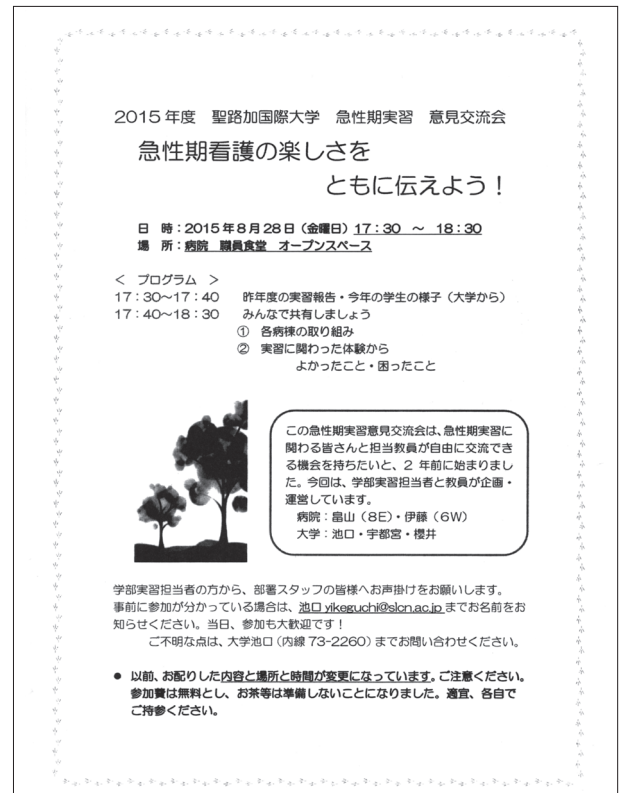


図1 第3回 意見交流会ポスター

る。

対策3：部署スタッフが参加しやすいグループワークを行う：実習指導に携わってよかった体験等について、病棟を超えて共有する。教員が担当する部署ごとに3つのグループを作り、参加者が発言しやすいように、学部実習担当者・教員がファシリテーターとなる。

②意見交流会の実際

日時：2015年8月28日 17時30分～18時30分

場所：病院 職員食堂

参加者：学部実習担当者11名・部署スタッフ4名・管理者等3名・教員3名 計21名

昨年度の学生の感想や学び・今年度の実習生のレディネスを共有したあとで、各教員が担当する部署を3つのグループに分け、学部実習担当者と教員がファシリテーターを務めながら、『昨年度の実習での取り組み』と『実習指導を行ってよかったことや困った体験について』の意見交換を行い、全体で共有した。

〈全体で検討・共有した内容〉

- 指導者と学生間で意見交換が活発となるようにカンファレンスを工夫する。指導者の隣に学生が座り、チームの一員として参加する。
- 手術見学やICU実習への学生の意見や感想が、ORやICUの指導者に届きにくい。学生は病棟のカンファレンス等で学びや感想を言うことが多いので、病棟の指導者からもORやICUへのフィードバック



写真1 交流会の様子

を意図的に行う。

- 各病棟の実習体制の違いについては、今後も情報共有しながらより効果的な実習環境について検討を行っていく。
- 患者を1対1で受け持つ時にしか学べない患者の背景や気持ちを考えられるような実習体験ができるようにしたい。その体験があると、卒後の指導も変わるし、看護師になってからもバーンアウトしないで続けられる。
- 部署スタッフは点で関わるため、学生の看護計画の意図やそこに込められた思いまで聴けていなかった。学部実習担当者の考えや教員の思いを聴き、自分の看護観を伝えたり、学生にどんな看護をしたいのかを聴いていいことがわかった。

表1 第3回 意見交流会アンケート結果

アンケート回答者 n=14 病棟管理者3名(21%) 学部実習担当者7名(50%) 部署スタッフ4名(29%)	
Q1 実習指導を行うにあたって、工夫したいことなど(抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> ●学生の担当を実習者とスタッフとどちらで行うとよいのか。それぞれのメリットとデメリットを考えながらよい方法をトライアルしたい。カンファレンス内容についても検討したい。 ●トライアルでぜひ学部実習担当者が学生を全部みるという方法を指導してみたい。継続的に見れるというのは、大きなメリットだと思う。 ●スタッフによって、異なる看護観を伝えていけるように関わる。 ●学生の情報共有をスタッフ間でどうしていくか、カンファレンスのやり方を工夫したい。 ●もう少し時間を作り、学生さんと関わっていきたい。また学生であるからこそ気が付くことがあると思うのでその視点を引き出したい。 ●受け持ち患者だけでなく、学生の手が空いたときに他の患者のケアに入り、比較できるともっと学べるのかなと思った。
Q2 実習を受け容れて、大変だったこと遣り甲斐を感じたこと(抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> ●一人で学生さんのことを担当する形になると大変。 ●受け持ちスタッフは学生さんがケアをするという思いが残っており、調整するのも気が引けることがある。学生さんの学びを継続的に見ることができるとは楽しいし、成長が追えるのは嬉しい。 ●学生がどう考えているのか、何を大切にしているのかということも話し合えたときは、理解が深まり、遣り甲斐を感じる。 ●血圧測定技術を確実に取得して欲しい。何度も測定し直すのは患者さんに申し訳ない。動脈触知の技術も取得して欲しい。 ●他の重症患者を受け持ちながら学生指導を行うので時間をゆくりとることが難しい。 ●学生の考えや看護観を聞きたくても、ほかの患者のことで忙しく話ができない時が多く、残念だと思う。学生が術後やせん妄対処などで大変な時期を経て、実習最後にキラキラした顔を見ているとよかったと思う。 ●普段、深く関わるのが難しいクリニカルパスの患者を担当した学生から、患者の想いや背景を聞くことができ、そのことを報告されたときに学生と看護観について話ができてやすい。初心を思い出し、仕事のやりがいをより感じられる。
Q3 このような企画や内容は、今後実習指導を行うにあたって有意義だと思いますか。	はい 14名(100%) いいえ 0名
Q4 今後検討したい議題について	●部署間で実習担当者同士の連携
Q5 自由意見	他の病棟のことが知れてよかったです。そして他病棟のスタッフがとてもやる気のあるスタッフばかりで、この病院で働いてよかったと思いました。

- ICUでは、いつ学生が実習に来るのか不確定なことも多く、関わりが難しいが、現地オリエンテーションでICU看護について伝えることなどを検討していきたい。
- 効果的に手術見学を行えるように、学生がスクラブへの着替えのために一時離席せず麻酔導入を見学するために、患者の手術出棟時に学生がスクラブで同行できるように、各病棟での更衣を検討する。
- 実習生への指導内容を指導者間で共有する記録用紙を作成する。

〈第3回 交流会終了時のアンケート結果〉

表1に記載。

Ⅲ. 今後の課題

現在、2015年度の実習が始まり、意見交流会での提案をもとに学生があらかじめスクラブを着用して手術室に入室できるようになり、手術見学時のスムーズな流れが生まれつつある。このような学習環境の改善は、急性期

実習に関わる病棟全体の協力により得られたものである。この学部実習担当者や部署スタッフの病棟を超えた連携は、学生が病棟と手術室との継続看護を認識し、更なる急性期看護の学びを促進する機会になると考える。

今回、新たな実習体制構築に向けての急性期実習における病院と大学との取り組みを報告したが、年度ごとの学部実習担当者の交代もあり、継続して関係構築を図っていく必要性や、部署スタッフも含めた病棟全体に実習指導への理解を深めていくことが今後の課題である。

引用文献

- 1) Lillian Gatlin Stokes, Gail Carlson Kost. (2014). 第16章 臨床場面における教授. 看護を教授すること原著 第4版 大学教員のためのガイドブック, Dian M. Billings, Judith A. Halstead, 奥村暁子ら監訳, 270 - 279, 医歯薬出版.
- 2) キャスリーン B. ゲイバーソン, マリリン H. オールマン. (2002). 臨地実習のストラテジー. 勝原裕美子監訳. 31 - 41. 医学書院.